

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□〜□で、二十一ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

一

次の①～⑩の——線部について、カタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

- ① 地球のオンダン化が進んでいる。
- ② 相手とコキユウを合わせる。
- ③ 彼女のセンモンは法律だ。
- ④ 寝ずにカンゴする。
- ⑤ 接戦の末、勝負にヤブれる。
- ⑥ 養蚕は日本の伝統産業だ。
- ⑦ 幕末の歴史について学ぶ。
- ⑧ 車窓からの風景を楽しむ。
- ⑨ 先祖を敬う。
- ⑩ 教室の環境をきれいに保つ。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

二

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

許諾が得られなかったため、大問二(P2～P13)は省略します。

三

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

見える人と見えない人の空間把握はあくの違いちがは、単語の意味の理解の仕方にもあらわれます。空間の問題が単語の意味にかかわる、というのは意外かもしれません。けれども、^①見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです。

たとえば「富士山」。これは難波なんばさんが指摘してきした例です。見えない人にとって富士山は、「上がちょっと欠けた円すい形」をしています。いや、実際に富士山は上がちょっと欠けた円すい形をしているわけですが、見える人はたいていそのようにとらえていないはずです。

見える人にとって、富士山とはまずもって「八の字の末広がり」です。

1

「上が欠けた円すい形」ではなく「上が欠け

た三角形」としてイメージしている。平面的なのです。月のような天体についても同様です。見えない人にとって月とはボールのような球体です。では、見える人はどうでしょう。「まんまる」で「盆ぼんのような」月、つまり厚みのない円形をイメージするのではないでしょうか。

②

三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです。「奥行おくゆきのあるもの」を「平面イメージ」に変換へんかんしてしまおう。

とくに、富士山や月のようにあまりに遠くにあるものや、あまりに巨大きょたいなものを見るとときには、どうしても立体感が失われてしまいます。もちろん、富士山や月が実際に薄うすっぺらいわけではないことを私たちは知っています。

2

視覚がとらえ

る二次元的なイメージが勝つてしまおう。このように視覚にはそもそも対象を平面化する傾向けいこうがあるのですが、重要なのは、こうした平面性が、絵画やイラストが提供する文化的なイメージによってさらに補強ほくわうされていくことです。

私たちが現実の物を見る見方がいかに文化的なイメージに染められているかは、たとえば木星を思い描えがいてみれば分かります。木星と言われると、多くの人はあのマーブリングマールブリングのような横縞よこしまの入った茶色い天体写真を思い浮かべるでしょう。あの縞模様しまもようの効果もありますが、木星はかなり三次元的にとらえられているのではないのでしょうか。それに比べると月はあまりに



見える人が見た富士山



見えない人が見た富士山

平べったい。満ち欠けするという性質も平面的な印象を強めるのに一役買っている(a)が、なぜ月だけがここまで二次元的なのでしょう。

その理由は、言うまでもなく、子どものころに読んでもらった絵本やさまざまなイラスト、あるいは浮世絵や絵画の中で、私たちがさまざまな「まあるい月」を目にしてきたからでしょう。紺色の夜空にしつとりと浮かびあがる大きくて優しい黄色の丸——月を描くのにふさわしい姿とは、およそこうしたものでしょう。

こうした月を描くときのパターン、つまり文化的に醸成された月のイメージが、現実の月を見る見方をつくっているのです。私たちはまっさらな目で対象を見るわけではありません。[過去に見たもの]を使って目の前の対象を見るのです。

富士山についても同様です。風呂屋の絵に始まって、種々のカレンダーや絵本で、デフォルメされた「八の字」を目にしてきました。そして何より富士山も満月も縁起物です。その福々しい印象とあいまって、「まんまる」や「八の字」のイメージはますます強化されています。

見えない人、とくに先天的に見えない人は、目の前にある物を視覚でとらえないだけでなく、私たちの文化を構成する視覚イメージをもとらえることがあります。見える人が物を見るときにおのずとそれを通してとらえてしまう、文化的なフィルターから自由なのです。

つまり、見えない人は、見える人よりも、物が実際にそうであるように理解していることになりません。模型を使って理解していることも大きいでしょう。その理解は、概念的、と言ってもいいかもしれません。直接触ることのできないものについては、辞書に書いてある記述を覚えるように、対象を理解しているのです。

定義通りに理解している、という点で興味深いのは、見えない人の色彩の理解です。

個人差がありますが、物を見た経験を持たない全盲の人でも、「色」の概念を理解していることがあります。「私の好きな色は青」なんて言われるとかなりびつくりしてしまうのですが、聞いてみると、その色をしているものの集合を覚えることで、色の概念を獲得するらしい。たとえば赤は「りんご」「いちご」「トマト」「くちびる」が属していて「あたたかい気持ちになる色」、黄色は「バナナ」「踏切」「卵」が属していて「黒と組み合わせると警告を意味する色」といった具合です。

ただ面白いのは、私が聞いたその人は、^③どうしても「混色」が理解できないと言っていたことでした。絵の具が混ざるところを目で見たことがある人なら、色は混ぜると別の色になる、ということを知っています。赤と黄色を混ぜると、中間色のオレンジ色ができあがることを知っています。ところが、その全盲の人にとっては、色を混ぜるのは、机と椅子を混ぜるような感じで、^④どうも納得がいかないそうです。赤+黄色≠オレンジという法則は分かっても、感覚的にはどうも理解できないのだそうです。


もう一度、富士山と月の例にもどりましょう。見える人は三次元のもを二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中でとらえている。

だとすると、^④そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、厳密な意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、空間を空間として理解することができるのではないか。

なぜそう思えるかという点、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。もちろん、実際にその場所に立っている必要は必ずしもありません。絵画や写真を見る場合は、画家やカメラが立っていた場所の視点を、その場所ではないところにながらにして獲得します。顕微鏡写真や望遠鏡写真も含めれば、肉眼では見ることのできない視点に立つことすらできます。想像の中でその場所に立つこ

した場合も含め、どこから空間や物をまなざしているか、その点が「視点」と呼ばれます。

同じ空間でも、視点によって見え方が全く異なります。同じ部屋でも上座(注6)から見たのと下座(しもざ)から見たのでは見えるものが正反対ですし、はたまたノミの視点で床(ゆか)から見たり、ハエの視点で天井(てんじょう)から見下ろしたのでは全く違う風景が広がっています。けれども、私たちが体を持っているかぎり、一度に複数の視点を持つことはできません。

このことを考えれば、目が見えるものしか見ていないことを、つまり空間をそれが実際にそうであるとおりに三次元的にはとらえ得ないことは明らかです。それはあくまで「」でしかありません。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』)

(注1) 難波さん：難波創太さん。3DCGデザイナーの仕事をしていたが、三十九歳の時にバイク事故で失明し、全盲となる。

(注2) マーブリング：水よりも比重の軽い絵の具を水面にたらし、水面にできた模様を写しとる絵画技法のこと。

(注3) デフォルメ：対象や素材の自然の形を、作家の主観を通して、そのイメージに合うようにとらえて表現すること。

(注4) 縁起物：縁起がいいとされるもの。

(注5) 概念：「…とは何か」ということについての受け取り方を表す考え。

(注6) 上座・下座：上座はお客様や目上の人が座る席、下座はお客様をおもてなしする人が座る席のこと。

問一

~~~~線 ㉠「一役買って」・㉡「まっさらな」・㉢「おのずと」のことばの意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

㉠「一役買って」

- ア 少し無理をして
- イ 一言つけ加えて
- ウ 困難に飛びこんで
- エ ある役割を担って

㉡「まっさらな」

- ア 何ごとに対しても疑いを持つさま
- イ よけいなものが混じっていないさま
- ウ ぼうぜんとして何も考えられないさま
- エ 自分の意志がはっきりとしているさま

㉢「おのずと」

- ア そうしようと思わなくても自然とそうなる様子
- イ 乗り気ではないが、関わることで解決する様子
- ウ 積極的に必ず求めた結果になるよう努力する様子
- エ 自分に関心がないことであつても結果を求める様子

問二

1

2

1 に入ることをもととして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あるいは

イ さらに

ウ けれども

エ なぜなら

オ つまり



問三 — 線①「見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違う」とありますが、具体的にはどのように違うのですか。本文中に具体例として出てきた「月」の例を使って説明しなさい。

問四 — 線②「三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「三次元を二次元化する」とは、ここではどういうことだと筆者は述べていますか。傍線部よりあとの本文中から、「〜こと」に続くように八字で抜き出しなさい。

(2) (1)をさらに強める原因となっているものは何だと筆者は述べていますか。本文中から二十字で抜き出し、最初と最後の三字で答えなさい。

問五 — 線③「どうしても『混色』が理解できない」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア それぞれの色を概念として把握しているので、「混色」という色が存在するとは考えられないから。
- イ それぞれの色を概念として把握しているのに、それらが混ざる、ということの意味が理解できないから。
- ウ それぞれの色を概念として把握しているので、概念が混ざってしまうと不快な気持ちになってしまうから。
- エ それぞれの色を概念として把握しているので、実際に見たことのない「混色」という現象は想像できないから。

問六

——線④「そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか」とありますが、なぜそのように考えられるのでしょうか。その理由を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 見える人には必ず「視点」が存在するが、同時に複数の視点を持つことはできないために、空間を正確に把握することができないから。

イ 見えない人には、見える人にある先入観がないため、一つの「視点」にとらわれることなく、自由に空間を想像することができるから。

ウ 見える人は、同じものであっても、一度に多様な視点で見ることになってしまっ、実際の空間をそのままにとらえることができないから。

エ 見えない人は、「視点」が常に一定で「視点」の位置を変えることがないために、空間が実際にそうである通りにとらえることができるから。

問七



に入ることはとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 視点としての空間

イ 空間のなかでの視点

ウ 私の視点から見た空間

エ 私が見たいと思う視点

問八 この文章の特徴を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 見える人と見えない人の立場を対比的にとらえながら、両者の合意点をさぐっている。
- イ 視覚障害者の事例を中心に取り上げることによって、現代社会の問題点を指摘している。
- ウ 数値や最新の研究データなどの客観的な情報を提供することで、説得力をもたせている。
- エ 図や具体的な例を活用することによって、読者が内容を理解しやすいように工夫している。

問九 次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 傍線部「の」の意味が他とは異なるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 浮世絵や絵画の中で
- イ 紺色の夜空に
- ウ 月を描くのにふさわしい
- エ 描くときのパターン

(2) 傍線部「ない」の意味が他とは異なるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 見える人と見えない人の空間把握の違い
- イ 富士山や月が実際に薄っぺらいわけではない
- ウ どうも納得がいかない
- エ 肉眼では見ることのできない視点